

ドライブの夜

愛知県名古屋市長 北原 岳

カルメンさんは、人気アイドルだった「ピンク・レディー」の曲名からその名前をつけた。

だから、勿論いわゆる源氏名にきまっているのだけど、僕は最初、そんな事情を知りもしなかった。

友人伝いに、そのアルバイトを打診されたとき、僕は困惑した。夜の街をカルメンさんと一緒にドライブをする。運転するのは僕で、カルメンさんを迎えに行き、車に乗せ、指示されたところを走る。たったそれだけのこと。でも、そんなことで本当にアルバイトが成立するのか。僕はにわかには信じられなかった。

大学を出てから定職にもつかず、先輩に格安で譲ってもらった中古の黒いホンダ車を使って、風俗関係で働く女性の送迎をして日銭を稼ぐ。それがいまのところの僕のすべてで、この状況をどうにかしたいと思いつながら、朝方、近隣の駐車場に車を停めてアパートに帰ると泥のように眠ってしまう。そんな日々を二年も繰り返している。

大学の授業で聞いた気がする経済の均衡というのは、こんなと

ころでとれているのだと思う。僕は時間を浪費している。その浪費した時間に金銭が支払われ、僕は日常の細々したことにそれを費やす。一方で、巨額の金が一瞬に空間を移動していき、留保され限られたやつらの地盤を固めていく。

僕はそんなことを考える時間さえ浪費しながら、やがて眠りに落ち、また翌日の送迎に出掛ける。

金は必要だった。だからカルメンさんのアルバイトは魅力的に思えた。ドライブをして、一時間に付き二千元もらえ、ガソリン代も別途支給される。

カルメンという名前に、違和感をおぼえたけれど、僕は友人にアルバイトを受けると伝えた。

数日後、スマホに電話がかかってきた。

知らない番号だったけれど、通話ボタンを押した。

「はい……もしもし……」僕は探るように、声を出した。

「もしもし、サクライさんの携帯でいいかしら？」くぐもった声が僕の耳に届いた。

「はい……」

「イトウさんから聞いてると思うけど、あたし、カルメンです」カルメンさんは、気だるそうな低い声でゆっくりと話した。

その電話で僕たちは会う約束をした。

例年よりもいくぶん早い梅雨明け宣言が出された週の、土曜日の夜だった。

湿気のせいで蒸し暑かった。

待ち合わせの花園神社は、周囲の灯かりにぼんやりと照らされていた。人影がたくさんあった。社殿の陰影がはっきり見てとれた。ときどき、酔客の叫び声と笑い声が聞こえてくる。スマホで時間を確認した。約束の時間まではまだ少しあった。

バラの花を胸に挿しているのが目印だと言われた。でも、この程度の灯かりの中で判別できるだろうか。それに、バラを胸に挿すという時代があった目印のつけ方が、僕にはうまく想像できなかった。

スマホをいじりながら辺りを窺っていると、不意に背後から「サクライさん？」と声をかけられた。

振り返ると、背の高い人が立っていた。それがカルメンさんだった。「驚いた……？」甘えるような声が耳に響いた。

カルメンさんは、本物のバラを挿しているわけではなく、花柄をあしらったTシャツを着て、青いジーンズを履いていた。

暗くてよくは分からなかったけれど、皺しわの隙間を埋めるような化粧が、逆に年齢を強調していた。紅い口紅が目をつけた。パーマが、湿気の中でさらに重たそうだった。

「は、はじめまして」僕よりもいくぶん背の高いカルメンさんの目を見て、僕は言った。その日洗ったばかりの白色のTシャツを、僕は目印にしていた。

「よかったわ、会えて」カルメンさんは首を小さく傾けながら言う。「あ、こちらこそ」どこに焦点を合わせていいのか分からず、お

そらく僕の目は泳いでいたに違いない。

「ちよつと、お茶しながら、話しましょうか」カルメンさんが言った。

明治通りに出て、適当なカフェを探した。あまり好きな感じじゃないけど、と言いながらカルメンさんが選んだカフェに入り、アイスコヒーを注文した。

店員が、カルメンさんの低い、作った様な女声に少しだけ反応した。それでも、店員の女の子はマニュアル通りと思われる接客をして、カルメンさんが紫色のハンドバッグから出した皺の寄った千円札を丁寧に受け取った。

二人分を支払うと、カルメンさんは何も言わずに席へ移動する。僕はトレイを持ってカルメンさんについて行く。

席に座ると、長い沈黙があふれた。

僕は、コーヒーのカップに何度も手をやった。飲みもしないのにストローをくわえ、先だけを囁んで、またテーブルに戻したりした。無意識に何度もスマホのチェックをしていた。時間は相当流れているはずなのに、実際には一分も経っていない。

カルメンさんは、鏡を出して、二度ほど化粧を直した。あこのあたりがうつすら青かった。周囲の客の何人かがこちらを見てこそ話をしている。

「サクライさんは、おいくつなの？」

「ええと、二十四です。もうすぐ五になります……」

「ふううん、若いわねえ……私はもう……老境の……オカマね」カルメンさんは僕を見つめて、少し笑いながら言った。それから、

口紅がストローに付かないようになのか、唇を巻き込むようにしてコーヒーを飲んだ。

「それで、やってくれる？」僕はそう言われて、すぐにバイトのことだとは思わなかった。きょとんとしている僕に、「バイトよ。車の、夜の……」とカルメンさんは笑顔で付け加えた。

「ああ、そうですね。何も、難しいことがなければ……、つまり、僕にも出来る程度のことであれば」僕はそう言った。

「出来るわよ。運転免許と車、持ってるんでしょ？」語尾を甘く伸ばしながらカルメンさんが言う。

「もちろん、です」

カフェの賑やかさで僕の声はかき消されたのかもしれない、それともカルメンさんは左耳が悪いのだろうか、僕の方に右耳を向けなおして「何？」と尋ねた。

「もちろんです」僕は周囲の視線を気にしながら、少し大きめの声で言った。

「うん、ありがとう。こんなオカマのおばさんにつきあってくれる人なんてなかなかいないと思ってたから」カルメンさんは軽やかに言う。

「はい」

「よかったわ。こんなにすぐに、バイトしてくれる子が見つかった」

僕は返事も出来ず、ただストローを噛んだ。

「車は……僕のは、中古の……古いやつですけど、大丈夫ですか？」しばらく続いた沈黙に耐えられずに、僕は尋ねた。

「うん、別にかまわないわ。だって……、走るんでしょ？」

「はい。車検は通ってます」

「なら、問題ないじゃない」カルメンさんは笑った。頬の皺がひび割れているように見えた。

僕は思わず目を逸らしたい衝動にかられた。

「それじゃ、明後日から。どうかしら？」

「はい……」僕は手帳を確認するふりをして、目の前にいるカルメンさんから視線を逸らし、下を向いた。周囲の好奇の眼差しからも逃げられたような気がして、そのままずっとそうしていたいくらいだった。

「日曜日ですね、大丈夫です」ほとんど何の書き込みもない手帳を見ながら、僕はそう言った。

「よかったわ。それじゃ、この住所に、来てくれる。夜の十一時きっかり、お願いね」カルメンさんはそう言うのと、ハンドバッグから紙片を出してテーブルに置いた。僕が手に取ったのを見届けると、「よろしくお願いね」と静かに言った。

カルメンさんは俄かに立ち上がり小さく手を振って店を出ていった。

周りの客は、カルメンさんを見ているのだろうか、それとも残された僕を注視しているのだろうか。きつと年取った「オカマ」と一緒にいた若造を見ているに違い。そんな自意識に押しつぶされそうになりながら、僕はしばらく顔を上げられなかった。

カフェを出ると、僕は友人に、どういう伝手でこの話が回ってきたのか電話で尋ねた。

「いや、よく分からないけど、川田さんの店の近くにあるゲイバーのママさん經由らしいよ。で、川田さんがドライバー知らないかって言うんで、車持ってるから、お前にも声かけたんだ」

「ゲイバーのママさん經由……」

「でも、お前の車って、年代もんだから、気に入ってもらえるか分からないし。でもさ、いろいろあたってただけで断られて、最後にお前にいきついたんだ。で、お前、やるの？」いまの送迎のバイトも紹介してくれた友人が、明るい声で尋ねた。

「ああ、まあ、たいした取り決めもないうちに、決まっちゃったっていうか……」

「はははは、まあ、安全運転でやってよ」

「気をつけるよ」僕はそう言って電話を切った。

新宿通り沿いを駅まで歩いた。クラクションや喧騒けんそうのせいで、さつき会ったばかりのカルメンさんの顔を思い出せなくなっていた。覚えているのは、厚く塗られた化粧とパーマのかかった髪型ばかりだった。

2

日曜日の午後十一時少し前、指定された住所を訪ねた。

早稲田通りを左に折れ、鶴巻町、関口、山吹町のあたりをぐるぐる回って、ようやくそのアパートは見つかった。門扉に書かれた住所は、ところどころが削れていた。

車を止め、エンジンはかけたまま車内で待った。念のためスマ

ホのアラームを十一時五分前に設定しておいたけれど、鳴る前にオフにした。もうすぐ約束の時間だった。

外階段をカルメンさんが下りてくるのが見えた。彼女は、僕の車に気づいたのか、こちらへ歩きます。運転席を出て、助手席のドアを開けると、カルメンさんは「ありがとう」と言った。

膝上の長さのスカートは、助手席に座るとさらにめくれ上がり、太ももがあらわになった。網タイツをはいたその足は、よく言えば余分な肉がついていない、悪く言えば貧相で骨ばって色気がなかった。

「どこに行きますか？ 夜景とか見に行きますか？」

「そうね。それもいいかもね。とにかく、車、出してくれる」カルメンさんは僕の顔をのぞきこむようにしながら言った。

何を話すでもない夜のドライブ。

僕はアクセルを踏んで、ブレーキを踏み、ウインカーを出して、ハンドルを切る。それをただただ何度も繰り返した。たまにカルメンさんが順路を指示したけれど、かといってどこか目的地へ誘導しているようにも思えず、車はときどき同じ道を走った。

「煙草、吸っていい？」

「どうぞ」僕は、そう言って車に備えつけの灰皿を出した。

「東京の人なの？ あなた？」

「いえ、大学でこっちに出てきてから、だからだとしてる感じがす」僕は答えた。

「二十四って言ったわね？」

「はい」

「ふううん、若いわねえ」はじめて会ったときと同じ様な節回しでカルメンさんは言った。

それからまた、沈黙が続いた。

時計に目をやると、すでに一時を回っていた。

「あたしみたいな人、はじめて？」カルメンさんが不意に尋ねた。

「え？」僕は質問の真意がすぐに読み取れなかった。

「だから、オカマよ」彼女はそう言って、僕の左足に手を置いた。

「いまは、死語ね、オカマなんて」そう言って笑った。

「ええと、そうですね。二人だけになるのははじめてです」僕は正直に答えた。

「大丈夫、取って食べたりしないから」彼女はそう言いながら、僕の股間を軽く撫でて、すぐに手を引いた。

「どこか、行きたい場所がありますか？」僕は話題を変えたくて尋ねた。

「うん、別にいいのよ、こうやってドライブしてるだけで」カル

メンさんは、窓の向こうの東京タワーに目をやりながら言った。

「あたしは、今年で六十歳。ずいぶん長く生きたと思うわ」カルメンさんが言う。

僕は「そんな年には見えません、若く見えますよ」なんて気の利いた言葉をかけるべきだったのだけど、うまく言える自信がなかったので黙っていた。

カルメンさんはそれ以上何も言わなかった。彼女の言葉は、僕に向けられているようで、でも彼女自身に向けて発した言葉のよ

うにも思えた。

「きれいなね。東京の夜は。いつだって、きれい……」カルメンさんは言った。

三時を回った頃、僕たちはカルメンさんのアパートの前に到着した。ありがとうと静かに言ってから、封筒が手渡された。カルメンさんが外階段を上っていく、ハイヒールの音がかすかに響いている。

車を出す前に封筒のなかを確認してみた。一万円札が二枚入っていた。走った時間にガソリン代を足しても多くもらい過ぎていた。だけど、この業界によくある御祝儀だと合点して、ジーンズのポケットに封筒をねじ込んだ。

それから、一週間に一度、ときどきは二度ほど、カルメンさんとのドライブは続いた。

時間はだいたい三時間から四時間程度だった。初回以降は一万円札が一枚入った封筒をくれた。細かな取り決めはしていない。だが、毎回、少し多めに払われているという実感があつた。

なぜだろう、僕はその一万円札を、最初に貰ったときから封筒に入れたまま机の引き出しに押し込み、使えずにいた。

三十年以上前、カルメンさんは、ナツコという名前で新宿の店に出ていた。その頃、ちよつとしたオカマブームなるものが起り、彼女は自分の店を出すまでに至った。

「ナツコ」を引退して、彼女は大好きだったという「ピンク・レディー」の曲名からカルメンの名前を取った。僕は音楽のストリー

ミングサービスからその曲を聞いてみた。いちどだけ、車の中でその曲をかけたことがあった。カルメンさんはすごく喜んだ。

僕は、例えばカルメンの名前の付いた曲を知ったからといって、彼女の生活に踏み込むことはしない。

もちろんカルメンさんもそれを望んではいない。老境に入った「オカマ」の生活に興味はなかったし、彼女の胸をふざけながら触らされても、とりわけ性的に何も感じはしなかった。

親よりも年上のカルメンさんに、僕は言葉にならない感情を抱くようになった。

カルメンさんと別れ、煙草の臭いがまとわりついた車の中でひとりになると、奇妙な虚脱感に襲われることがあった。僕の手に残された一万円札入りの封筒をぐちゃぐちゃに丸めてしまいたい衝動にかられたこともあった。

ドライブの途中、有名な観光スポットを訪れても、彼女は車からは降りなかった。何か必要なものがあるときは、車を停めさせ、コンビニに僕を走らせた。

東京湾を臨みながらカルメンさんが油の話をしたことがある。水溜りにおちた油は、虹色に輝きながら漂う。結合したり、離れたりする。水溜りが大きければ、例えばそこが池だったりすると、その油の虹色は、拡散してやがて消えてしまう。人間の感情も、きつとそんなもんなんだけど、でも……消えてしまうのは悲しい、と彼女は言った。

ときどき、カルメンさんは、ナツコの時代の話をする。それは

バブルという一時代と重なっていて、きらびやかな印象を与えたりするけど、流れ去った時間の量的な、質的な大きさに僕は慄然とする。カルメンさんの厚く塗られた化粧は、その時間を覆い隠そうとして、でもうまくいってはいない。

どれだけの大金が、カルメンさんの店で動いたのだろう。それが新宿の外れの小さなバーであっても、日本の経済の一面を象徴していたことに驚きを感じる。きつと彼女はきらびやかな毎日を、充実しながら過ごしていたのだろう。

彼女の顔の皺は深く長い。僕は、最初の日以来、あまり目を向けないようにしていた。目の周りの重苦しいシャドーや、頬の頂点を染める濃いピンク色が、不意に僕を憂鬱な気分させるからだ。

東京の街を、ときどきは埼玉や神奈川まで、何の目的もなく走ること。

僕はどこかでそのことに意味を求めている、それがすかさされたり、ぼやかされたりする度に、カルメンさんの香水や化粧の匂いになで、言葉にならない苛立ちを感じていたのかもしれない。僕のまったくの自分勝手な感情なのだけだ。

古びた二階建てのアパートの前でカルメンさんを車から降ろし、受け取った封筒の一万円札を確認すると、それまで感じていたかすかな、怒りのような感情がふいに温度を失い、同情とも違う、彼女への思いに変化したりする。

二階の、いちばん左の部屋に灯かりがつく。カルメンさんが、ヒールをならして外階段を上り、建物の向う側に消えた後、電気がつくのはその部屋だった。僕は、その淡い光が点灯するのを確

認してから、車を出す。

僕とカルメンさんは、閉鎖的な車の中であって、距離を保ち続けた。

僕は現在の彼女のプライベートを知らない。あの部屋だって、住んでいるのかどうか分からない。ただの衣裳部屋かもしれない。でも、それは僕にはどうでもいいことだ。僕はただ彼女に雇われている。それだけの関係なのだ。でもそう思っているくせに、僕は彼女の一万円をいまだに使えず、封筒は机の中にたまるばかりだった。

3

死に場所を探している、と言われてハンドルを切る僕の手が、震えた。

皇居の周りをあてもなく走っているときだった。勿論カルメンさんの指示だった。深夜の靖国通りが工事のために少し渋滞していた。「右に曲がって」と言う彼女に従い、僕は皇居の方へ車を向けた。

「こんなにきれいな街なのにな……」それは自分に向けた言葉なのだろう。カルメンさんは続けた。「いざ、死に場所を探すとすると、ここ、って場所が見つからない」

「別に、死ぬことなんて……」僕はその後、何て言おうとしたのだろう。

「大丈夫、サクライさん、あなたには迷惑かけたりしないから」

「……」

「隅田川に身投げも出来ない、東京タワーからは飛び降りられない、新宿の路地裏は、もう……時代が変わってしまったわ」嘸み締めるようにカルメンさんが言う。「死ぬのが恐くなかった頃はどんなに転んでも死ねなかったのに……」

「観覧車、見に行きませんか？」僕はそう尋ねた。

僕は、ふいに観覧車が見たいと思った。父方の祖父母が、よく連れて行ってくれた遊園地の観覧車。ただぐるりと回るだけのそれが、僕は好きだった。パレットタウンも葛西臨海公園も、観覧車の営業はとくに終わっている。そんなこと分かっているのに、僕はカルメンさんを誘っていた。

「動いてない観覧車を見るの？」

「あの、巨大な輪っかを、見るだけでも……」

僕は彼女の返事を待たずにお台場に向けて車を走らせた。

「何で観覧車……？」

「自分でもよく分からないけど。あれって同じところに帰ってきますよね。色んな景色を眺めて、遠くに行った気分になって、でも下りる場所は最初と同じで。それが、僕に妙な安心感を与えるんです、小さいころから」僕は言った。

「同じ場所に戻る……」カルメンさんがつぶやく。

街の灯かりにすつと浮かんでいる観覧車を見上げた。カルメンさんはやはり車を降りない。僕は外に出て深呼吸した。カルメンさんは何も言わずに、ただ観覧車に目をやっているように見えた。呆然としながら、でもその瞳にはなにがしかの意志があるように、

僕はふと感じた。

早期に発見したはずの癌細胞はすでに転移していた。

助かる見込みが無いわけではないけれど、治療や入院にかかる費用はカルメンさんの生活を圧迫するのに充分だった。

だから死に場所を探している、カルメンさんはそう言った。

このドライブの本当の目的はそれなのか。僕は、西は高尾山まで車を走らせる。人生なんて、通り過ぎた街灯や暗闇みたいに、ただ明滅するだけだと言われた。それが、ドラマの台詞みたいに聞こえたので僕は思わず笑いそうになった。

もしも助手席にいるカルメンさんが死んだら、僕はどんな感情を抱くだろう。泣いたりするのだろうか。

歳をとったオカマのカルメンさん。彼女の胸はホルモンのバランスを崩して垂れ下がっている。不意に触らされた、下着越しの乳房は、歪な脂肪の塊だった。顔や首に刻まれた皺は、彼女が決して後戻りできない場所にいることを物語っていた。

たまにシートを倒して眠る彼女の軀は、地の底から鳴り響いているようだった。環七や環八を走っていて、その軀が僕の眠気をふき飛ばすこともあった。

アパートの前で、車から降りるカルメンさんは、すでに死に場所を探すと言ったときの悲壮感をどこかに置き忘れているようだった。きっと、あの感情は拡散してしまったのだろう。

僕もまた、封筒の中身を確認して、カルメンさんに抱いたいくつもの感情を流し去ってしまう。それが次のバイトへの心の準備

でもあるから。

4

十月末のある日曜日の夜。その日は少し肌寒く感じられた。

僕はいつもより少し早い十時にアパートの前でカルメンさんを待った。いままで時間を一分たりとも遅れたことのないカルメンさんが、その日は十分以上も遅れて出てきた。

「ごめんなさい」理由は言わず車に乗った。

どうでもいい世間話が終わるといつもの沈黙が流れる。

こうしていつの間にか四ヶ月も、カルメンさんを隣に乗せたドライブは続いている。それが、彼女の言うような死に場所探しの彷徨なのか、僕には本当は分からない。彼女は内側にうごめく感情の波と戦っているのかもしれない。

流れ去る風景に目をやり、ときどき感想を言い、思い出したように右や左に曲がれと指示を出す。明確にどこかに行きたいと言うときもあった。東京ドームの屋根が見たいとか、湾岸道路を走りたいとか、雷門が見たいとか。その度に、僕はスマホから繋いだナビゲーションを頼りに、カルメンさんの期待に答えようとハンドルを切ってきた。

その日、カルメンさんは、千葉の市原に行きたいと言った。今までも都外に出たことはある。だけど、千葉方面に向かうのは初めてだった。

「もちろん、行きます」僕は答えた。「どこか、目的の場所は……?」
カルメンさんは、ハンドバッグの中に手を入れ、何かをこそぞ探しはじめた。

財布の間に挟まっていた紙片は、最初に彼女自身の住所を書いて僕に渡したのと同じ様な粗末な切れ端で、そこには「千葉県市原市五井」の文字と、暗くてよく読み取れなかったけれど番地が書いてあった。そこまで明確な目的地の提示はいままで一度もなかった。

「これは……」僕はそこに何があるのかを尋ねようとした。

「何も聞かないで」カルメンさんが言った。すこし緊張した、早口だった。

「わかりました」僕はそう言って、車を走らせた。

東京を抜けるとき、巨大なマンション群が見えた。首都高が蜘蛛の巣のように巡り、月は見えなかった。夕方から夜にかけて、雨がぱらついたけれど、道路はすでに乾いていた。

エンジンの音だけが車内に響いていた。カルメンさんは少し不機嫌そうな表情をしながら、窓のずっと向こうに目を向けていた。

千葉市に入り、幹線道路脇に車を停めて、スマホに正確な住所を入力した。指示に従いながら、一方でスマホのマップも参考にしながら僕は車を走らせた。

総武本線の線路が見えた。ドライブは続いた。たくさんの車が幹線道路を行き来している。ふと遠くに海が見えた気がした。ビルやマンションの明かりの隙間に見えたあの暗闇は、東京湾だったのか。カルメンさんは小さな寝息を立てていた。

内房線に沿うように車を走らせた。しばらく行くと、住宅街に入っていた。そこを抜けると五井駅が見えた。時計を見ると日付が変わっていた。下り電車がちょうど到着したのか、駅前には会社員や学生らしい人々が歩いているのが見えた。彼らをやり過ぎして、本格的な住宅街へと車を滑らせた。

道は狭くなったり広くなったりを繰り返した。ときどき小さな公園が見えた。街灯もすくなくなり、家々の灯かりが道を照らしていた。

いくつ角を曲がっただろうか、やがて目的地周辺に辿り着いた。車を降りて、電柱や民家の表札で番地を確認した。「行け」と言ったカルメンさんは、助手席で目を閉じていた。まだ眠っているのだろうか。

道路の右側に林があった。その向かい側に一戸建ての家が並んでいる。そのうちのひとつが、該当する番地の家だった。僕はその手前に車を静かに停めた。

「カルメンさん、着いたみたいです」僕はそう言って彼女の肩をゆすった。

「……うん、ありがとう」カルメンさんは上体を少し起こして、「どこ?」と尋ねた。

「あの、左から三番目の家です。白い自動車が車庫に停まってます」僕は指差しながら言った。

「そう、あそこなのね……」カルメンさんは囁みしめるように言う。

僕にはその家は何であるのか見当もつかない。カルメンさんは、

窓越しに見つめたまましばらく動かなかった。ときどき、溜め息が聞こえる。該当した家の玄関の灯りがついたり消えたりする。その度に、カルメンさんは「あつ」と小さな声を上げた。家の住人が外に出てくることはない。勤めに出ているにしても、もう帰宅済みなのだろう。

洒落た装飾が施された玄関ドアは、なんだか僕たちを拒んでいるように冷たく感じられた。でも、ここを訪ねた理由も分らない僕には、拒まれる理由はない。カルメンさんは、まだその家の外観を眺めている。何も起こらない。家はただ静かに呼吸をしているだけだった。

風が吹いて、林の木々がさわさわ揺れた。

そうしているうちに時計は一時を回った。門扉を照らしていた灯かりが消えた。住人はもう床についたのだろうか。

カルメンさんはゆっくり向き直り、僕を静かに見つめた。

「ありがとう……。もう行きましょう」カルメンさんがゆっくりと言った。

「はい」僕は、エンジンをかけた。住宅街の、深夜の静けさに、中古の車の下品なエンジン音が響いた。

帰りは急がなかった。都心へのバイパスをゆっくりと走った。カルメンさんは何も話さなかった。それはいつものことでもある。だけど僕には、その沈黙が変にくすぐったい。あの家は何だったのか、その疑問が僕をくすぐるのだ。

缶コーヒーが飲みたいと言うので、バイパスを降りて市道脇に

あるコンビニに寄った。カルメンさんは、缶コーヒーはブラックしか飲まない。僕は自分の分と二本買い、車に戻った。

「これ……昔の写真」カルメンさんは、僕に一葉の写真を見せた。そこにはまだずっと若い頃のカルメンさん、ナツコさんが写っていた。周りにいる三人も、おそらく同じ業界の人なのだろう、首の色と合わないほどに顔を白く塗っている。彼女たちは、はち切れそうなほど、本当に楽しそうに笑っている。

「若いでしょ」しわがれた声だった。「煙草、吸っていい？」コーヒーに口をつけてからカルメンさんは言った。

僕はいつものように、備え付けの灰皿を準備した。

「若かったのよ」そう言って、カルメンさんは違う写真を僕に見せた。そこには、男の服を着たカルメンさんが写っていた。それは、どこにでもありそうな、幸せそうな家族写真だった。夫と妻、妻の手には小さな赤ん坊が抱かれていた。

少し強張った表情をしているのは夫だった。妻は、柔和な笑みを浮かべて正面を見ている。

赤ん坊は今にも泣き出しそうだった。

「この赤ちゃんは……」誰、ですか？と尋ねようとしたけど、僕は思い止まり「女の子ですか？」と尋ねた。

「うん、女の子よ、かわいいでしょう」カルメンさんは、煙草の煙のせいだろうか、さつきよりもっとくすんだ声で答えた。

「はい、とてもかわいいです」僕は、言った。

その写真がどんな意味や形を示しているのか、僕は尋ねなかった。カルメンさんも、きつと答ええないだろうと思う。カルメンさんは、

すこし皺の入った写真を大切そうにハンドバッグにしまった。

ふいに、死に場所を探しているという言葉が思い出された。彼女のドライブの目的地は、最初からあの家だったのではないだろうか。見つけることの出来なかった死に場所の代わりに、あそこを最後の場所を選んだのではなかったか。

彼女にとつての大切なヒトがいる場所。カルメンさんは、そつと眺め、言葉も残せずにあそこから離れるしかなかったのだ。

自転車に乗った若者が三人、コンビニにやって来た。古びた黒い車とその助手席に座るカルメンさんに気づいたのか、下品な笑いを浮かべながら何か言っている。そんなことはいままでも何度かあった。その度にカルメンさんは、気にしないで言った。今日は、彼女がそう言う前に、僕は車の外に出ていた。

三人組の真中にいた男の胸ぐらをつかむと、他の二人が僕を囲んだ。何かわめいているけれど、僕には聞こえない。

フェンスに押しつけ、「笑っただろう、謝れ」僕は言った。

男は何度か身体をひねって抵抗を試みた。他の二人が蹴ってくるのが見えたので、身をひるがえすと、仲間の足に当たった。

「謝れ」

「……」

「謝れ！」

「……ゴメンナサイ」

「こいつらにも謝るように言え」

「……おい」そう促されると、他の二人も謝罪した。

「車の方を向いて、あの人に、謝るんだ」僕は言った。

「すいませんでした」三人が頭を下げたのを見届けて、僕は運転席に戻った。

彼女は煙草の煙を窓の外へすつと吐いた。

「あなた、見かけによらず、勇ましいのね」カルメンさんが言った。「あんなの、いつものことなのに」

「あなたのためにやったとかじゃなく……」

「……そつ。ありがとう、あなたのやさしさね。忘れないわ」カルメンさんが言った。

彼女はコーヒーを飲み終え、煙草を灰皿でもみ消した。車内に白い煙が漂った。車を走らせ、窓を開けると、煙は風の向こうに消えてしまった。

アパートの前でカルメンさんを下ろす。ハンドバッグから給料入りの封筒を出そうとしたとき、スカートがめくれた。黒いストッキングの切りかえしまで見えた。やはり、肉の削げ落ちた、とても細い太ももだった。

いつものように封筒を手渡される。感触的に、紙幣は一枚ではないと思った。

「またね」カルメンさんは言った。

「はい」僕はそう答えて、彼女に精一杯の笑顔を向けた。

カルメンさんは、車を降りるとき必ず次の約束をした。だけど、その日は「またね」だけ言い残して、ハイヒールを響かせながら外階段を上がっていった。

封筒の中身を確認した。千円札が十七枚と五千円札が三枚入っ

ていた。

僕はそれをジーンズのポケットにねじ込んでから車を出した。

5

それがカルメンさんとの最後のドライブだった。電話での連絡はなかった。こちらからかけるのも気が引けるし、押しかけるわけにもいかない。

風俗関係の女の子を送ると、車内に必ず香水の匂いが残る。それは軽やかで甘く、透明感のあるいい匂いだった。そんな残り香の中に、ときどきカルメンさんの、化粧の匂いを嗅いだような気がするが何度かあった。でも、そんな錯覚もすぐにおこらなくなった。

秋が過ぎて冬になった。就職活動をするきっかけを持たないまま、また一年が過ぎてしまった。安アパートの家賃や駐車代、光熱費は送迎のアルバイトでまかなえた。

アルバイトで知り合った女の子と付き合いはじめた。クリスマスプレゼントを買ってあげたいと思い、部屋に転がっている金をかき集めてみたけど、たいした額にはならなかった。

机の引出しを久し振りに開いた。そこには、カルメンさんからもらった封筒が、ぜんぶで十二枚あった。その十二回分のアルバイト代には、一度も手をつけていなかった。

僕はカルメンさんと十二回のドライブをした。

その間、僕は彼女のことをどんな風に考えていただろう。

ほんの二ヶ月前の記憶なのに、はつきりとしなかった。「老境のオカマ」、彼女は言っていた。いまなら他にも言い様があるのに、彼女は自分のことを「オカマ」という言葉で表現し続けた。

彼女は僕と一緒に、「死に場所」を探してただけだったのだろうか。ふと、カルメンさんの手の中、しわくちゃに折れた写真のことを思い出した。

カルメンさんが探していたのは、あの写真、そのものだったのではないだろうか。

僕は封筒をそのままにして、机の引出しを閉じた。

バイトを紹介してくれた友人から、カルメンさんが亡くなったと聞いたのは、翌年の正月だった。カルメンさんの死に場所は、あのアパートだった。

僕は彼女と初詣に来ていた。僕はどんな顔をしていたのだろうか、電話を切ると、彼女が「大丈夫？」と尋ねた。

「うん、何でもないよ」僕は無理して笑いながらそう言った。

すると彼女は僕の手を取り、人だかりができた賽銭箱さいせんばこの前へ引つ張った。

にぎやかな新年の境内で、僕は記憶の中のカルメンさんを辿った。頬の肉が落ちた、皺だらけだったカルメンさんの顔を、もうはつきりと思い出すことはできなかった。